

研究協力者研究報告書

群馬県における小児期発症インスリン依存型糖尿病の予後について
(分担研究：小児インスリン依存型糖尿病の実態と治療法，長期予後改善に関する研究)
研究協力者 鬼形和道

研究要旨：群馬県における15歳から45歳までの糖尿病患者(10,900名)の実態調査において，その比率は約11%(1,200名)であった。このうち，10代と20代の患者の比率は17%(205名)であり，男女比では男性が多かった。病名の判別可能な315名のうちインスリン依存型糖尿病は75名で23.8%を占めたが，男女比は26名：49名と女性患者の比率が高率であった。各年代別の患者数は，10代27名，20代30名，30代10名，40代8名であり，30代患者のうち4例は10代に発症していた。糖尿病合併症の有無の明らかな患者は275名であり，何らかの合併症を有する例は96例(インスリン依存型：インスリン非依存型=22名：74名)であった。糖尿病合併症の比率が高いことが示され，より積極的な治療の必要性を示唆していると考えられた。

・研究目的

わが国における小児期発症インスリン依存型糖尿病の頻度は欧米に比較して非常に少なく，その長期予後は不良である。これらの患者は，その治療のみならず，就職・結婚などの社会的・精神的問題を多く抱えている。若年糖尿病患者の中には，15歳未満の小児期に発症したインスリン依存型糖尿病で，年齢が成人に達したために内科へ移行した例も少なくない。内科移行後に糖尿病合併症を発症する例が多いと予測されるが，詳細なデータは少ない。今回，若年糖尿病患者の現状を分析することにより，小児期発症のインスリン依存型糖尿病患者の治療状況・合併症の有無などについて検討することを目的とする。

・研究方法

日本糖尿病協会群馬支部に属している22の内科小児科機関を対象に，15歳から45歳までの糖尿病患者の実態をアンケート方式にて調査した。糖尿病と診断されている患者の総数，および，15歳から45歳までの患者の有無を問うた。該当患者があった場合には，個々について，性別・年齢・糖尿病発症年齢・病型(インスリン依存型またはインスリン非依存型)・治療・糖尿病合併症の有無とその種類を尋ねた。生活面では，婚姻の有無，職業の有無，および，就職・結婚・妊娠に関する問題点等の記入欄を設けた。

・研究結果

群馬県内22施設における糖尿病患者の総数は約10,900名であり，15歳から45歳までの糖尿病患者の比率は約11%(1,200名)であった。病名の判別可能な315名のうちインスリン依存型糖尿病は75名で23.8%を占めたが，男女比は26名：49名と女性患者の比率が高率であった。各年代別の患者数は，10代27

名，20代30名，30代10名，40代8名であり，30代患者のうち4例は10代に発症していた。糖尿病合併症の有無の明らかな患者は275名であり，3大合併症の網膜症，腎症，神経症のうち何らかの合併症を有する例は96例(インスリン依存型：インスリン非依存型=22名：74名)であった。

・考察

今回の調査から，小児期に発症したインスリン依存型糖尿病の患者が10-20年の長期の糖尿病罹患期間を有することを示しているものと思われる。罹病期間の長期化は，糖尿病合併症の発症頻度を高めることは周知のことである。15歳から45歳までのインスリン依存型糖尿病患者のなかで何らかの合併症を有する例は22名(29%)と高率であった。合併症の中で腎症の頻度が最も高率であったが，その程度については今回の調査からは明らかでない。また，合併症発症の危険因子の検討には個々の詳細なデータ解析が必要であろう。15歳未満の小児期に発症したインスリン依存型糖尿病の治療・管理は，小児科内科産婦人科の密接な連携が必要であると考えられた。

一方，インスリン非依存型糖尿病の中にも10代後半より20代にかけてすでに糖尿病合併症を有する例もあり，その治療・管理についての検討も極めて重要である。

・結論

群馬県における15歳から45歳までの糖尿病患者の実態調査において，病型の判別可能な315名のうちインスリン依存型糖尿病は75名で23.8%を占めたが，男女比は26名：49名と女性患者の比率が高率であった。30代患者のうち4例は10代に発症しており，小児期発症のインスリン依存型糖尿病患者の中には罹病期間が長期化する例が増加している。何らかの合併症を有する例は22名であった。